



HPはこちら

## 実態に勝るものはない！

**根拠を示せない労働時間管理が幹申4号の団体交渉で明らかになる！**

東日本ユニオンは中断していた幹申第4号「2022年3月ダイヤ改正に関する乗務員行路の労働時間不足に関する申し入れ」の団体交渉において、新幹線統括本部にダイヤ改正実施以降に現れている労働時間不足の実態を迫り「乗務員の業務等の見直し」で変更したモデル時間の詳細について議論しました。

### 「必要な労働時間」の中身を会社が語れず！

団体交渉において、組合側は各箇所では減算されたモデル時間（準備時間、折り返し時間、整理時間）の詳細を求めましたが、新幹線統括本部は「必要な労働時間は確保している」「時間計測から距離計測にした」「一定程度の余裕時間を設けている」と繰り返すばかりで、根拠を示さないどころか、根拠を示さない理由も明らかにしませんでした。

### 実態からデジタル（距離計測）に変更されたモデル時間において 安全やサービスに影響が出ている！

乗務員は運行に必要な作業とそれを実行する労働環境が必要です！そして乗務員一人ひとりが培ってきたサービスを提供することこそ、お客さまへ安心を提供し、信頼を得られるのではないのでしょうか。

これまで一連の作業の中に余裕時間がありました。この余裕は乗務員に向けて心身を整えるほか、社員一人ひとりがお客さま目線に立ち、対応することができる時間でもありました。今回、一連の作業をデジタルに計測し、モデル時間をタイトにするだけでなく、作業そのものを短縮せざるを得ないほど必要な時間が削られています。新幹線統括本部は「作業の見直しはない」としていますが、現場社員はお客さま目線で考え、早期のドア開扉や案内放送をはじめ列車運転の打ち合せなど、これまで実施してきた必要な一連の作業を実施するために、社員一人ひとりの判断によりサービス労働が発生しています。

私たちは、必要な労働時間として付加することが重要であり、実態に則した労働時間（モデル時間）を求めてきました。労働時間を管理する経営側が労働者にその細部を示さないことは「時間内に作業を終わらせろ！」といているに過ぎません。

しかし、その指示する作業すら説明できない現場実態があることも事実です。さらに一連の作業には現場社員が運行のために、そして、お客さまのために考え実施してきた業務への付加価値すら奪われかねません。

### 会社の発展に必要なのは効率化だけで良いのか！？

「必要な労働時間」は机上では測れない！現場で働く社員の実態に勝るものはない！

「創造性」と「やりがい」はデジタルに働くだけでは生まれない！

心身にゆとりある労働環境を私たち東日本ユニオンと一緒に取り戻そう！